

第1回川崎臨海部再生リエゾン推進協議会 議事録

■日時：平成30年7月20日(木) 15時00分～17時00分

■場所：川崎生命科学・環境研究センター（L i S E） 1階大会議室

1 開会

○臨海部国際戦略本部：開会

○臨海部国際戦略本部 鈴木本部長

川崎市臨海国際戦略本部長の鈴木でございます。毎日暑く、特に今日は暑い感じでございますが、お忙しい中、殿町キングスカイフロントにお集まりいただきましてありがとうございます。この推進協議会も、今回2年ぶりに殿町キングスカイフロントで開催させていただくことになりました。前回まで、臨海部の将来ビジョンをつくろうということで、この推進協議会でも節目節目でご意見をいただけてきました。前回は最終的な素案をお示しして、皆様からご意見をいただき、あるいはパブリックコメントというかたちでご意見もいただいてまいりまして、この3月末に、臨海部ビジョンの策定を終えることができました。いよいよ今年度からは、その実現、推進という段階でございますが、まず、これまでいろいろご意見をいただき、ご協力いただきましたこと、皆様方に心より感謝を申し上げる次第でございます。また、つくって終わりではなく、これから実現に向かって取り組んでいくことが何より重要かと思います。今日の議題は、臨海部ビジョンの策定と今後の取組ということで、ビジョンの中に将来像、基本戦略、リーディングプロジェクトというものを位置づけておりまして、そういったものを私どもから改めてご説明し、またご意見を頂戴したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。また、前回ご意見をいただきました、この協議会の位置づけについてもご審議いただければと思っております。よろしくお願いいたします。

冒頭申し上げましたように、このキングスカイフロントでは2年ぶりの協議会開催でございますが、2年前にご参加の方、あるいは新たにメンバーになられてご出席いただいた方々は、来られて大変びっくりされていると思います。2年前に比べて建物がどんどん増えまして、今日の協議会の後に意見交換会で使わせていただくホテルも、6月より運営を開始しています。ライフサイエンス分野中心の研究拠点としての姿がしっかりとでき上がってきたと考えております。こういった中で、これまで川崎臨海部に関わる皆様方でこの協議会ができ上がってきておりましたが、新たにこのキングスカイフロントのライフサイエンス分野の機関の方々にもお声掛けをして、この協議会に参加していただくような働きかけも、これから私どもとしてはさせていただきます。特にライフサイエンス分野に限らず、世の中では様々な分野が融合して新しいイノベーションを生み出すという流れになっておりまして、多様な分野の方々が一つのテーブルで意見交換をして新しい取組が生まれる、それが臨海部ビジョンでも謳っているポイントの一つでございますので、この協議会の中で、皆様方にいろいろなご発言、ご議論をしていただきまして、実りある協議会となりますことをよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございます。

○臨海部国際戦略本部：資料確認

○大西会長

会長を務めております大西です。よろしくお願いいたします。先ほど鈴木本部長から今日の主

旨についてご説明がありました。議事の展開によってはリエゾン推進協議会という慣れ親しんできた名前も今日が最後になるかもしれないということです。この地域の開発が一段落し、一定の完成形に近づいているということですが、臨海部全体としては、新規開発という点では、例えば南渡田でこれから動きが出てくると思います。いろいろと広い地域の中で、新しいホットスポットが出てくるわけですが、それに伴って川崎臨海部全体としても新しい機能が付与されて変化していくということで、日本の中でも最も注目されている地域の一つではないかと思います。もちろん、羽田空港とのアクセスが格段に向上するというのも重要な変化の要因になってきます。今日も様々な角度から話題提供があってご審議をいただくことになりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、「議題 1 臨海部ビジョン策定と今後の取組について」であります。これについては川崎市からご説明をお願いいたします。

2 議題

(1) 臨海部ビジョン策定と今後の取組について

○臨海部国際戦略本部 松川課長

臨海部国際戦略本部の松川でございます。お手元でございます資料に基づきまして、臨海部ビジョンのパンフレット、資料 1、資料 2 の 3 点を私からご説明申し上げます。

まずは、臨海部ビジョンのパンフレットをお手元にご用意ください。はじめに臨海部ビジョンの 30 年後の川崎臨海部の目指す将来イメージを書かせていただいております。30 年後の川崎臨海部の目指す将来イメージにつきまして、川崎臨海部は 30 年後も産業地帯として輝き続けるためにこういう場所になっていたい、そのために皆さんの努力でこういうことを進めていきたいということを、様々な方々から意見を聞いて、その結果をまとめたものを、将来イメージとして掲載させていただいております。「豊かさを実現する産業が躍動する」と「多様な人材や文化が共鳴する」を一つの目標といたしまして、それぞれの状況・状態を 9 つにまとめさせていただいております。ここで表現させていただいているものにつきましては、何よりこの地域が我が国を代表する産業拠点として 30 年後も輝き続ける、そのために様々な人やモノがここに集まってくるという状態を作ることを 30 年後の将来ビジョンとさせていただいております。次に、川崎臨海部のあゆみでございますが、この地域は 100 年以上前に埋立事業が始まったことに端を発し、企業の集積が図られ、その後高度経済成長を牽引した、我が国を代表する工業地帯でございます。その後に環境問題、いわゆる公害問題といった様々な課題に対して、民間事業者の皆様方を中心に、フロンティア精神に基づきまして官民共同で新陳代謝を繰り返しながら、この地域の発展に取り組んできたという歴史がございます。このリエゾン推進協議会もその後の産業空洞化の際に、改めてここを盛り上げていこうということで、その課題解決のために官民共同で取り組む協議会として設置されて今に至るという歴史的な背景がございます。新たな拠点形成というところでは、新しい芽を植えて次の産業として育てるという観点から、この地域をライフサイエンスの拠点にするというような新たな活動も生まれているところでございます。

ビジョン策定の背景と目的でございますが、そうした常に新しいものを生み出す工業地帯であるものの、100 年以上前に歴史が始まって今に至るということから装置産業の設備がやや老朽化している、あるいは敷地の中に明らかに遊休な土地がなかなかないところですが、歯抜けのように使われていない土地があるという状態も見受けられ、近年では石油産業の統合などが進む中で、

さらなる機能向上や土地利用転換が求められているところでございます。今まさに、30年後という将来を見据えてこの地域をどうしていくかというところを、改めて立ち返って皆さんで考えていただいて、その考えていただいたものを皆で協力して取り組んで行こうという指針とするために、このビジョンを策定したというものでございます。

次に、30年後に想定される社会経済環境の変化、川崎臨海部の30年後を見据えた役割、ビジョンを貫く基本理念といったところにつきましては、臨海部の立地企業の皆様方をはじめ関係者の方に150を超えるヒアリングを行っており、それらのかなり膨大な資料をまとめたものでございます。30年後のエリアのイメージにつきましては、基本的な考え方として、今ある機能、今あるものを、いかにそのまま引き続き残して磨き上げて輝かせていくかという視点でエリアのイメージを書いております。研究開発機能を拡充して様々な分野の研究開発機能をここに位置付けていくことにより、臨海部全体のリード役になっていただきたいということも考えておりますし、これまでの臨海部を支えていただいた基幹産業の皆様におかれましては、それを高度化・高機能化するという視点で書かせていただいております。ビジョンの構成でございますが、ビジョンを考える時に、今ある課題にどう対応していくかという視点ですと、何年か持たせればいいのかというような発想になりがちですので、まずは30年後を見据えて30年後の望ましい将来像を設定した上で、今とのギャップをどう埋めていくかということを考えるという視点で、基本戦略やリーディングプロジェクトを仕立てるということで整理をさせていただいております。

リーディングプロジェクトとして、13のリーディングプロジェクトを書かせていただいております。このリーディングプロジェクトにつきましては、資料1をご覧くださいと思います。リーディングプロジェクトは13のプロジェクトで構成されております。プロジェクト1「新産業拠点形成プロジェクト」につきましては、臨海部全体の発展をリードする牽引役として新たな産業拠点を形成してまいりたいというものでございまして、キングスカイフロントが概成してまいりましたので、キングスカイフロントにつきましてはその機能をいかに産業に波及させていくかというステージに入っていくわけでございますが、次の拠点といたしまして、南渡田地区に新たな産業創出を促すような拠点形成をしてまいりたいというプロジェクトでございます。

次のプロジェクト2「資産活用・投資促進プロジェクト」は、現在の設備の老朽化、あるいは土地利用の複雑化、混在化という状態を解消していくために、設備投資に対しての支援制度を設ける、土地の正常化を促すような取組内容を考える、あるいは土地利用転換をする時に土壤汚染対応でコストが掛かり過ぎる、その土壤汚染対応のことが計画の最後になって分かって計画を見直す必要があるというようなことを避けるために、こういった支援・対応ができるかということを考えるプロジェクトでございます。

続きまして「水素エネルギー利用推進プロジェクト」でございます。キングスカイフロントの東急REIホテルには水素を使った燃料電池が入っておりますが、基本的には水素利用を推進するというよりも、この地域で水素を使いやすくするために、パイプラインを活用した水素ネットワークを構築するという事業でございます。続いて「低炭素型インダストリーエリア構築プロジェクト」ですが、ここはエネルギーの利用、あるいは廃棄物のリサイクルといったことに先進的に取り組んできた地域でございますが、それを一層高めていくというプロジェクトでございます。

次は「港湾物流機能強化プロジェクト」でございます。現在、川崎のコンテナ貨物の取扱量は年々伸びているところでございますので、その機能をさらに伸ばしてまいりたいというところでございます。具体的には東扇島の掘込部を埋め立て、そこに新たな土地を生み出しまして、物

流機能を強化していくということが位置付けられているプロジェクトでございます。

続きまして、プロジェクト6「臨海空間を活かした地域活性化プロジェクト」でございます。この地域は横浜のみなとみらい等とは違ひまして、当然のことながら産業を中心に活性化するというところでございますが、ここで働いている皆様方からは「なかなか近くで食べたり遊んだりするような場所がない」という話もよく聞きますので、外の方がここで楽しむ部分も含めまして地域活性化を図っていくというプロジェクトでございます。

次は「世界に誇れる人材育成プロジェクト」でございます。今、人が減っていく中で採用をどうするか、あるいは離職率をどう下げていくかという問題を各社が抱えていると思われまふ。特に、人が減っていく、自動化が進んでいく中でなかなか技能継承ができていないという課題をかなりうかがっているところでございます。その出口といたしまして、共同の研修プログラム、教育プログラムを作り、人材育成を図っていくというプロジェクトでございます。

次がプロジェクト8「働きたい環境づくりプロジェクト」でございます。ここにいかに人材を集めていくかということ考えた時に、例えば女性の方が働きたい、働きやすい環境をつくるために共同の保育所を整備する、交流機能を整備するといったプロジェクトでございます。

続いて「緑地創出プロジェクト」については、この臨海部の工場の敷地は、工場立地法が昭和49年に施行される以前から操業されている地域でございますので、川崎ですと15%の緑地確保になっておりますが、その緑地の確保が難しいという状態でございます。生産設備を更新するためには緑地を増やさなければならぬので、どんどん自分の敷地の中で使える土地が減っていくというジレンマに陥っておりまして、それを避けるために、工場の敷地外に緑地をつくって工場立地法上の工場緑地として達成する。敷地外に作る時に市民利用がしやすいような形態に整えるということを制度的に構築してまいりたいというプロジェクトでございます。

次が「職住近接促進プロジェクト」でございます。かつてはこの地域の近くに社宅等があり職住が近接していたということがございますが、近年はマンション開発等の影響により、職場の近くに人が住んで働いているという状況は段々少なくなっているということがございます。そういったことから交通混雑も、遠くから人が来ることによってかなり多くなっているということもありますので、改めてこの地域に働く方がこの地域に住みやすいまちづくりをしていくという考え方で整備を進めていくプロジェクトでございます。

続いて、「企業活動見える化プロジェクト」でございます。先ほどの人材育成等のプロジェクトでも出てまいりますが、この地域について、昔のイメージが引きずられているということがございまして、なかなか採用が困難だということがあったり、あるいは川崎は細長い地形ですが、宮前区や麻生区の方々からすると、臨海部は昔の公害の歴史のようなイメージがついてしまっていて、あまり良いイメージがないということも調査では分かっております。そのイメージを変えていくために、企業と共同でPR活動を行ってまいりたいというプロジェクトでございます。

次に「災害対応力向上プロジェクト」でございます。企業の方がそれぞれに防災対策、災害時の対応に取り組まれているわけですが、例えば自分のところはきちんと岸壁等を整備されていて災害後の復旧ができたとしても、隣が崩れることによって物が出せないという問題もよく聞かれる問題でございますので、そこについて共同でネットワーク化を図って災害対応力を向上するという取組でございます。

最後に、これがかなりご要望の多いところだと思いますが、「交通機能強化プロジェクト」でございます。臨海部は島で構成されておりますので、どうしても川崎駅から直接バスで移動される

ことが多い地域でございます。基幹的な交通軸といたしましても、JR 南武支線は接続駅が川崎駅ではなく南武線の尻手駅ということがあり、東京・横浜から来られる方は、川崎で乗り換えられないということもありまして、川崎駅からバスで来るという方が多いということでございます。今、6 時～7 時台に 3 分おきにバスが出ているという状態ございまして、これ以上バスも増やせないというところもありますので、短期的に取り組める内容、中期的に取り組める内容、長期的に取り組める内容ということをいくつか複合的に合わせまして、とにかく早く交通機能を強化していくというプロジェクトでございます。ここまでがプロジェクトの概要のご説明でございます。

続いて、資料 2 をご覧ください。2 月に開催した前回の協議会におきまして、このリエゾン協議会がこれまで臨海部再生プログラムを旗頭に臨海部の活性化に取り組む協議会として、ずっと臨海部の発展を見守ってきた協議会でございますが、今後は「臨海部ビジョン」を一つの旗頭とさせていただきます、この協議会に引き続きこれを見守っていただきたいと思っております、前回は承をいただきましたのでこの協議会で臨海部ビジョンの進行管理を行っていくという資料になってございます。3 月末に臨海部ビジョンを策定・公表した以降に、すでにいろいろな取組をさせていただいております。臨海部ビジョンにおきましては 30 年後の将来像の実現に向けて 10 年間でどのような取組をしていくかということをも 13 のプロジェクトでまとめているわけですが、10 年間でやればよいと思っているわけではなく、すぐにでもスピード感を持ってできるものからやっていくということでスタートさせていただいております。例えば、基幹的交通事業の整備のようなハード系の整備は 10 年スパンで時間がかかってしまうと思いますが、ソフト的な事業、仕組みづくり、新たな制度構築といったものについては 1～2 年でできてしまうものですので、それぞれスピード感に濃淡をつけながら、あるいは注力するポイントを絞りながら早くやった方がいいことには手をつけていこうと思っております。当面 2 年間で全てのプロジェクトについて、一定の整理をさせていただきたいと思っております。ハード系の整備で時間がかかるものにつきましても、例えばそのハード系の整備の機能的な内容の整理、あるいは事業スキームの整理といったものについては、2 年間で終えたいと思っております。その他の新たな仕組みづくりや制度構築につきましては今年度に内容のたたき台を整理させていただいて、来年度はそれを施行すべく実際の合意形成や意思決定を図って再来年度からは新制度がスタートするというスピード感でやりたいと思っております。具体的には、臨海部立地企業 20 社で構成するリエゾン研究会等で既に 5 月以降にグループワークをさせていただいたり、個別企業の方々とプロジェクトの具体化に向けて打ち合わせをしたり、行政内部におきましても、市長をトップとする検討会議、課長級の会議を設置して 4 月以降検討をスタートさせていただいているところでございます。この協議会におきましても、今年度末にはその進捗状況をご報告申し上げ、意見交換をいただきたいと思っておりますし、来年度につきましては来年度末にどこまでちゃんと進んだかということについて、中間評価をしていただきたいと思っております。

ご説明は以上でございます。引き続き、中村から資料 3、4 についてご説明申し上げます。

○臨海部国際戦略本部 中村理事

それでは、資料 3 に基づきまして、協議会構成員の拡大についてご説明をさせていただきます。まず、協議会構成員拡大の考え方でございます。この協議会につきましては、社会経済環境の変化や産業構造の転換など、川崎臨海部を取り巻く状況が目まぐるしく変化する中で、臨海部の現況を踏まえた課題解決や新たな取組の検討を進めていくというかたちになっております。現在の

構成員につきましては、川崎臨海部に立地している石油、石油化学、鉄鋼、エネルギー等の企業のほか、産業振興財団、港湾振興協会等の関係団体、あるいは行政として市の他に国の機関、あるいは神奈川県にも参加していただいております。さらに地元の町内会連合会、商店街連合会にも参加していただいております。ビジョンを策定し、今後進行管理をするにあたり新たな構成員を増やしていきたいと考えております。

まず一点といたしまして、臨海部に立地しているけれども加入していない企業、団体がございますので、できるだけ加入を促進してまいりたいと思います。もう一点、ビジョンの推進に関わる上で、例えばAI・IoT関連、水素関連、交通系事業者等、臨海部の活性化に関わる企業・団体につきましても新たな構成員として加わっていただきたいと考えております。

具体的にどのように加入促進を図っていくかということでございますが、臨海部ビジョン策定後、ここにいらっしゃる企業とはビジョンの説明と意見交換をさせていただいておりますが、この協議会にまだ加入していない企業も訪問してビジョンの説明をしながら、加入促進を図っていきたくて考えております。もう一点は、臨海部に関連する団体がございます。新たなものとしてはキングスカイフロントネットワーク協議会等もございますが、このような団体にうかがって、団体の会合の中で積極的に加入を促し、この協議体自体が川崎臨海部の産官学がそろって一番大きな組織体と考えておりますので、できるだけ多くの方に加わっていただきながら、臨海部の活性化に努めていきたいと考えております。説明は以上でございます。

○大西会長

ありがとうございます。臨海部ビジョンが最終的にまとめられた。これについては協議会もいろいろな意見を申し上げたり、審議をしたりしてきました。今後はこれを市とともに見守っていく立場と言いますか、進行管理をしていく役割を持つということで、具体的なプロジェクトとこれからの進め方ということで、当面2年間の目標が設定されたということでございます。それから、それに伴って協議会の構成員についても新たな方々を加えて、より充実して、網羅性を高めていきたいという主旨のご提案でございました。これらについて、ご意見のある方は挙手をお願いいたします。

○旭化成 宮下氏

旭化成の宮下でございます。よろしくお願いいたします。先ほど、いろいろなプロジェクトについてのご説明いただきまして、ありがとうございます。先般、鈴木本部長とお話をさせていただく機会がございまして、その時に、臨海部ビジョンというのは川崎市が市民の皆様の理解を促しながら川崎市としても臨海部への施策を取りやすいようにということも考えてビジョンを作っているという話を承りまして、これは本当にありがたいお話だと拝聴いたしました。13あるリーディングプロジェクトの中で弊社が関わっているのは二つございまして、その一つに緑地創出プロジェクトがございます。これについては、市民の憩いの場のような共通の緑地を設置し、川崎市が工場立地法や緑化指針等の法的要件を整えて、2020年を一つのターゲット、目標にして、法的要件も整えてそういう市民の憩いの場みたいなところで企業の緑地も確保していけるようなことを目指しているというお話を承りました。まさに臨海部の企業に対する川崎市民の皆様の理解も得ながら、また企業の立場から見ても非常に大きなメリットのあるWin-Winの取組をスピーディに進めさせていただいているということに大変感謝をしております。引き続き、制度の整

理に関してはいろいろな要件がございますので、弊社としても積極的に関わって意見も言わせていただきたいと思いますし、またこういったプロジェクトに限らず、企業に目を向けたご活動をしていただいている川崎市の皆様には大変感謝をしております。弊社としても積極的に関わっていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○大西会長

ありがとうございました。それでは、足立先生からコメントを頂戴したいと思います。

○東京工科大学 足立教授

それではご指名でございますので、全体のまとめを含めてコメントしたいと思います。ご存知の通り、我々が集まっておりますのは川崎臨海部再生リエゾン推進協議会という名前がついているわけですね。「再生」という名前がついているのは、先ほど臨海部の歴史のお話でしたが、100年前に川崎で経済のビッグバンが起こって大きく発展したわけですが、20世紀後半になりまして産業空洞化、アジア諸国等の追い上げもあり、従来型の成長モデルでは難しくなったということで、産業界においても、また市においても、公害問題、過密問題等のいろいろな問題を抱えていることから、大西先生や柏木先生も入られて「再生」をやろうじゃないかということで20年間に始まったと聞いております。今回できました新しいビジョンは、「再生」を乗り越えて、新しい実り、新しい方向ができたということで、非常によく検討されたものだと思います。その背景には、昔の非常に落ち込んだ時期をどうするかともがき苦しんでいた時代から、30年後を見据えた新たにデザインをしようということになったと思います。これは、世界的にも100億人の地球人口がこれから直面する一つの大きな問題点に対して、川崎市がその先陣を切って新しいソリューションを出してきたということだと思います。そういう意味で、世界を見据えたことをやられたということですので、今回作られた方々には非常に深く敬意を表したいと思います。それに対してどうするのかということで、13のリーディングプロジェクトですが、これは具体策がないと絵に描いた餅になってしまい、問題点だけを列挙するだけではビジョンとしての性格は持たないわけですが、今回はリーディングプロジェクトというかたちでの新しい具体的なアクションプログラムを作られているということは非常に大きいと思います。アクションプログラムはたくさんありますが、何通りかに分類して考えますと、一つはインフラの整備、新しい受け皿を作っていく。これは非常に重要なことで、新しい体に合わせたインフラを作る、受け皿を作る。道路整備にしても何にしても、ある種川崎市には向かい風であったのが追い風になった部分があります。それは羽田空港、それから港湾です。今までは港湾はお荷物と言われていたが、うまく機能するようになった。高速道路も結節点になりつつありますし、インフラがプラスの方向にあります。もう一つ、これは具体的にいい方法だと思いますが、持続的な発展のためのエネルギー政策、水素への移行、低炭素化社会、資源の再生、リサイクル、その他資源生産性を上げるという視点での取組をされているというのは非常に大きいと思います。最後に最も重要な、誰がやるかということ。今回のビジョンづくりの中にも、若い方々が参画されている。もちろん女性も男性も老いも若きもということですが、特に若い方々が非常に注力されて絵を描かれたということになりますので、非常に重要なポイントは、これから担う人たちの意見が入っているということだと思います。また、最後にお話しがございました進行管理につきましても、短期に1年、2年とこういう会合を持たれるということで、これからリバイスしながらやっていく。なかなかビジョ

ン通りに一本調子では行きませんから、うまくリバイスして行って、より良い世界モデルに仕上げていただければと思います。

○大西会長

ありがとうございました。まさに産官学が集まって、それから地元の方々にも加わっていただいて議論してきたことをさらに発展させようというためのビジョンができたということでございます。先ほど、協議会の構成員の拡大についてもご提案がありましたが、それらを踏まえて、名称あるいは規約について改正案を考えていただいていますので、その内容をここで提案していただいて審議したいと思います。

○臨海部国際戦略本部 中村理事

それでは、名称変更、規約改正についてご説明させていただきます。資料4をご覧ください。前回の協議会におきまして、臨海部ビジョンの進捗状況を本協議会で共有すること、及び協議会構成員の拡大を図ることを事務局から提案させていただき承認していただきました。また、協議会の名称を分かりやすくという提案をいただき、事務局で検討することとなりました。このことを踏まえ、今回、新名称案として「川崎臨海部活性化推進協議会」を提案させていただくものでございます。その理由につきましては、川崎臨海部再生リエゾン推進協議会規約改正の背景をご覧ください。川崎臨海部再生リエゾン推進協議会につきましては、リエゾン研究会の活動を通じて培われた産官学のネットワークを今後も活かすとともに、産学公民が連携し、再生プログラムの実践的な推進を目指す組織として設置したものでございます。この協議会におきましては、企業間の連携強化や新産業拠点の形成等に一定の成果を上げてきましたが、しかしながら、日本国内も含め世界規模でさらに大規模な社会経済環境の変化が起こる中でも、産業と環境が高度に調和する地域として川崎臨海部を持続的に発展させるため、今回「臨海部ビジョン」を作成したものでございます。この協議会の性格は、企業・団体・行政が一堂に会し、ビジョンの共有や意見交換を行うとともに、臨海部の現況を踏まえた課題解決や新たな取組の検討を進め、さらなる川崎臨海部の活性化を目指すのに最も適した協議会と考えております。また、そのような協議会にするために新たな会員も加えるものでございます。このようなことから、「川崎臨海部活性化推進協議会」と名称を変更させていただくとともに、それに合わせて規約を改正することを提案いたします。今回、協議会名を変更することから、旧規約を変更し、新規約を作成したかたちを取らせていただいておりますが、今までの再生リエゾン推進協議会が果してきた役割は非常に意義がありますので、新規約公表時には、先ほど説明させていただきましたこの背景も合わせて掲載する予定でございます。以上、名称変更・規約改正について事務局から提案させていただきます。

○大西会長

ありがとうございました。本協議会の名称変更、それに伴う規約改正が提案されました。これについてご発言がありましたらお願いします。協議会の歴史を遡っていくと NP0 法人産業・環境創造リエゾンセンターが重要な役割を果してきていますが、リエゾンセンターから何かご発言はありますか。

○NP0 法人産業・環境創造リエゾンセンター 菅原氏

リエゾンセンターの菅原でございます。名称変更に関して一言だけ申し上げたいと思います。

このリエゾン推進協議会は、これまでの長年の参加者の活発な情報交換、協議等を通じて川崎臨海部の再生はある程度進んでいると考えています。また、30年後を見据えた臨海部ビジョンが今年3月に策定されたということで、新たな展開の時期に入ったということで、この時期にこの協議会の名称変更をするということは理にかなっていると考えております。この協議会が今後会員を拡大していこうという時に、今までの名前ですと、これまでの経緯もあり、リエゾンセンターの会員でないと加入しにくいというところが出てくるかもしれません。また、リエゾン推進協議会は市の主催でございますが、先ほど説明のあったリエゾン研究会等のリエゾンセンター関連の会議については当NPOが主催する会議でございまして、市の主催の会議とNPO主催の会議で両方がリエゾンという名称を使っていると何となく分かりにくいという気がいたします。リエゾンセンターの専務理事としては、今回の名称変更については大変寂しいという思いがございまして、全国のコンビナート地域ではリエゾンセンターというのは知名度がある組織でございまして、川崎臨海と言えばリエゾン、リエゾンと言えば川崎という方が多々いらっしゃると考えております。ただ、先ほどの提案にもありましたように、企業・団体・行政が今後とも連携をしてやっていく、一堂に会してやっていくということでございますので、私としては今回の名称変更はやむを得ないかなという気がしております。

○大西会長

少し思いを残しながらも、前を向いた議論もあったのでいろいろとそれが混ざってこういうことになった訳ですが、前回、少し新しい展開にもなったので、名称についても検討してもいいのではないかと、確か加治副会長からお話しがあったように思います。それがきっかけとなって事務局の方でも検討したという経緯もあったとうかがっていますので、加治副会長からご発言をいただければと思います。

○加治副会長

副会長の加治でございます。よろしくお願い申し上げます。私としましては、新たに30年後を見据えたビジョンができ上がり、これは具体的に進めなければいけないと思っておりますし、そして進めるにあたって、このキングスカイフロントという注目を浴びているエリアがある一方、新しい課題も生まれてきている。そういったことでこの臨海部の取組としては、一つのターニングポイントといいますか、ステップアップする時期に来ているのではないかと思いますし、それを名称変更で強く印象づけて、ここから新しい気持ちで取り組んでいくといったことで、名称変更というのは意義があるのではないかと思います。川崎市にとってこの臨海部は大変な重要なエリアだと思いますし、今日ここにお集まりの皆様にとっても、仕事の間として臨海部の発展とともに、それぞれの企業の発展が伴っていくということをこれから進めていかなければいけないと思います。そういった意味で、これをきっかけとして、川崎市としてもさらに発展していくし、それを臨海部が支える。そして一緒になって企業も繁栄していくということに繋げていかなければいけないと思います。私は、いろいろな場面で挨拶をしたりすることがありますが、最近よく話すのは、特に市内の北の方に行くと、ぜひ臨海部に行ってくれ、キングスカイフロントを見てくれ」いうことを、一般市民の方を含めていろいろな方にお話しします。やはり、同じ川崎市民であっても、なかなか臨海部には行っていないようです。同じ川崎市民の方でも、最近の様子を見ていないから昔の悪いイメージを引き摺っている方もたくさんいらっしゃる。そういつ

た意味で、川崎市民の方に「臨海部ですごいことが起きている」「川崎市とは思えない」「そういったことが起きているのでぜひ機会があれば行って欲しい」という話をすると、興味を持っていただけますし、実際に見に行くと皆さん大変驚かれて、本当にすごいことをやっているという口をそろえておっしゃいます。ましてや、ここから対岸の羽田を見ると、橋ができつつありますから、本当に羽田が身近になってきたということも合わせて見ていただくと、臨海部のイメージを大きく変わっていき、大きな変化が起きているという認識を持っていただけるということでございます。ぜひ皆さんもいろいろな方に臨海部の取組について宣伝していただければと思います。

○大西会長

ありがとうございました。改めて新しい名前を見ますと、「川崎臨海部活性化推進協議会」ということで、非常に収まりのいい、まさにこの通りだなと思います。それで、歴史的経緯もあってここに至ったということですので、規約については、先ほどの説明にもありましたが、背景と経緯を書いたものについては残していくということで、臨海部のリエゾン研究会から出発した様々な展開があったわけですが、そういうことを踏まえて新しいメンバーも加わるということで、分かりやすい名前で再スタートをしてはどうかというご提案であります。私も、前向きなご提案で賛成したいと思っておりますが、これは協議会の名称変更ということで、会員の皆様の賛同を得ないといけないということですので、拍手を持って確認をしたいと思いますがいかがでしょうか。

(拍手)

ありがとうございました。皆様の賛同を持って名称変更が決まったということで、規約変更についても拍手でご賛同ということでよろしいでしょうか。

(拍手)

それでは、新しい規約の下で、新しい名前で臨海部ビジョンを実現に向けて推進していくということで決意を新たにしていきたいと思います。ありがとうございました。

(2) リーディングプロジェクトに関する取組について

・新産業拠点形成に関する取組

キングスカイフロントネットワーク協議会について

○大西会長

続いて、臨海部ビジョンのリーディングプロジェクトに関する取組についての議題に移ります。まずは、新産業拠点形成に関する取組として、「キングスカイフロントネットワーク協議会について」というテーマで、キングスカイフロントネットワーク協議会の野村様にご出席いただいておりますので、ご発言をいただきたいと思います。

○キングスカイフロントネットワーク協議会 野村氏

ただ今ご紹介いただきました、キングスカイフロントネットワーク協議会の会長をさせていただきます、実験動物中央研究所の理事長をしております野村と申します。よろしくお願いいたします。加治副会長からキングスカイフロントについての熱い思いをお聞かせいただきまして、身が引き締まる思いで、また名称も変わった中で責任を感じながらこの仕事を進めていきたいと思っております。キングスカイフロントというのはどういうことで始まって、どういうことをしているメンバーがいるのかということを、皆様にご紹介をさせていただきます、今後ぜひ皆様

にも一緒にこのまちづくりを進めていただければと思います。まず、平成 13 年から旧いすゞ自動車の工場跡地を UR に売却したところから始まっております。もう 17～18 年の歴史はございますが、実際にこの地域が具体的に動き始めましたのは、平成 20 年、今から 10 年ほど前でございます。その時、当時の阿部孝夫市長が、この地域をなんとか川崎市の新しい顔にしていきたいということで、このまま自由にここを売却すると、羽田空港の横ということで、倉庫等になっていくだろうということで、それはそれで世の中のためになるわけでございますが、そうではなくて川崎市としても戦後 70 年、日本を引っ張ってきた京浜臨海部の、今後 20 年 30 年先を見据えた一つの拠点にこの地域をしていきたいというところから、ぜひ知財産業、特にライフイノベーションに使ってきたいという熱い思いで、この地域にバイオや再生医療といったものを中心とした近未来の医療の一つの研究拠点にしていきたいと、そういう思いからこの地域の開発が始まりました。それで、平成 23 年に、私ども公益財団法人実験動物中央研究所が第 1 号でこの地域に参りました。当時の写真を見ていただきますと、私どもしか建っておりませんで、砂埃が舞う中に私どもは来て、当時「暴挙」「何が無謀なことをするんだ」という周りからの非常に厳しい声に耐えながら砂埃を浴びていたのが 7～8 年前でございます。それから今このように 65 機関が進出してまいりまして、ホテルも出てきたということで、街ができてまいりまして大変嬉しく思っています。福田市長が、「川崎の南端は世界の最先端」とおっしゃっていますが、ここにはいろいろな最先端技術、尖った技術の研究所が集まっております。最初は何もなかったもので、どういう街にしようかということを数名で集まって考えた時に、この地域を 21 世紀のライフイノベーションのショーケースにしていきたい、ここは羽田もございますので世界の中の日本ということで街づくりをしていこうじゃないかということを考えました。ここは東大、京大、慶応等のサイエンスの世界で非常に影響力のある医大がございませんので、そういう意味では何もないという弱みを強みに変えまして、組織の壁のない街づくりをしよう、そういう研究拠点にしようということも考えました。それから最初にこの地域をライフイノベーションのショーケースにしようとする時に、私どももしかなかったもので、国際戦略総合特区を取りに行く時も、全く新しいライフイノベーションのショーケースをつくるには、真っ白な画用紙に絵を描いた方が描きやすいと、更地ばかりの逆風をそういう言い方で説明をして取りにいったわけですが、そういったことで逆風の中でこのまちづくりをしてまいりました。再生医療の産業化の拠点、近未来医療の実装拠点にしていきたいということでやり始めたのですが、なんとか大きな風を吹かさない限りこの地域は目立ってこないだろうということで、関係者でいろいろと仕掛けをつくりまして、国際戦略総合特区を始め、リサーチコンプレックス、その他いろいろな国の制度をうまくここに呼び込むことに成功いたしました。国から仕組みというものは作っていただきました。また、市からも大変大きなご支援、県からもご支援をいただいてこういうものができてまいりました。ただ、やはり箱だけの研究機関ができて仕方がありませんので、そこに中の人間が皆で魂を入れていく。そういう研究拠点を作っていこうという中で我々が一番考えておりますのは、顔の見える研究拠点づくりをしていこうということです。なぜ顔の見える研究拠点かといいますと、ここは神戸やつくばに比べまして非常に小さい。小さいということは、歩いて皆のところに行けますので、そうであれば顔の見える関係をつくって、どこかで誰かが何かをしているのであれば一緒にやろうということがいつでもイメージできる、そういうまちづくりをしていこうということで、これも、小さいという強みを活かしてつくってきたい。そういう思いから始めさせていただきました。ここには実験動物中央研究所が第 1 号でございますが、その他、この隣にはナノテクノロジーでは日本の第一

人者である片岡先生がリーダーをしていただいている iCONM がございます。それから国立医薬品食品衛生研究所です。これは国の医薬品・食品関係のレギュレーションのルールを作る研究所でございまして、これがここにあるというのは大変大きな意味がございます。それから、ジョンソン・エンド・ジョンソンの東京サイエンスセンターです。これは研究所というよりは医療機器のトレーニングセンターでございまして、年間1万数千人の医師、特に外科医がここに来て手術の練習をされるわけです。そういう時に、場合によっては私どもの研究所にも寄っていただくなどの関係を持っております。それから、神奈川県のリフイノベーションセンターがございます。こちらは、再生医療関係の事業化に向けて、再生医療の細胞づくりから、最終的な再生医療関係のベンチャーなど、数多くの企業・研究所等が入っております。

それから、研究者に食事をしていただいたり、泊まっていたりする賑わいの拠点が必要だということで、東急ホテルにご協力いただきまして、東急 REI ホテルウェアハウスという名前の素晴らしいホテルができました。それからその隣には大和ハウス工業による RGB1・2 という施設ができておりまして、その中に慶應義塾大学の殿町タウンキャンパス、それから東京工業大学が入っており、今後は神奈川県が新たにつくろうとしているヘルスイノベーションスクールというのも入ってくる予定でございます。全部はご説明できませんが、いろいろなものがございまして、そういう中で国のいろいろなプログラム、支援もいただいております。特に、片岡先生のナノテクの技術を利用いたしました体内病院をつくっていききたいという夢に向かつてのコンソーシアムには、いろいろなところが関わっていて、病院に行く時代から、病院を体の中に取り込んで、体の中から治していく時代にしようというナノテク技術を使った素晴らしい研究も進んでおります。それから慶應義塾大学医学部の中村雅也先生は、CYBERDYN というロボットスーツのベンチャー企業と組みまして、まずは再生医療で神経が伸びるということが見つかりまして、脊髄損傷の患者さんの神経を再生医療で治そうということから始まっているのですが、それでも患者さんの病気の具合によっては簡単に治りませんので、それを CYBERDYN のロボットスーツ HAL を使いましてリハビリもしていこうというものです。それに再生医療の細胞の安全性は、実験動物中央研究所と国立医薬品食品衛生研究所で確認していくということで、この地域全体が協力し合いながら、最終的には近未来医療をここで作り上げて行くということもやっております。そのほか、慶應義塾大学の殿町キャンパスでは、百寿総合研究センターが川崎市立病院と組みまして、高齢者の健康に関する学術調査を始めており、特に宮田先生という慶應の有名な先生がここにビッグデータの拠点を作っていただいておりますので、そのようなものも今後使っていけると思っております。それから、日本で最も成功しているペプチドリームというベンチャーがございます。こちらと東京工業大学が組んで、中分子 IT 創薬というのが進んでいくことになると思います。ペプチドリームというのをぜひ覚えておいていただければと思います。また、私どもは地元の皆様にも貢献していきたいということで、8月1日に夏休み子どもイベントを開催しています。なぜこれを始めたかと言いますと、元々は私が父親として夏休みの子どもの自由研究で8月の終わりに大変苦労した記憶がございまして、そういうことに何か貢献ができれば、それこそお子様にもためになります。それよりお父さん、お母さんに貢献できるのではないかと思います。それを7年前にうちが100名、200名を対象に始めたのが最初です。今年は2,000名を超えたいと思います。このようなものが8月1日にここがございます。大変多くのイベントが企画されておりますのでぜひお越しいただければと思います。こうすることで皆が集まって、本当に魂を込めた研究拠点にしていくんだということで、キングスカイフロントでは、世界を相手に何とか戦っていきながら皆

さんと協調していく。もちろん尖らなければ研究機関として誰も認めてくれませんので、尖りたいと思いますが、ただ尖るだけでは皆様と一緒に仕事はできません。競争と協調をうまく使いながら、このキングスカイフロントを今後発展させていきたいと考えております。そういう中でここには尖った研究しているところが多く、臨海部の皆様方と隔離されているのではないかと感じておられる方もいるのではないかと思います。我々としてはぜひ皆様と一緒に仕事をしていきたいという思いが非常に強くございます。もちろん今日ご参加の企業の皆様の中には、会社の本業とは別に、新たな事業形態としてライフサイエンス関係をやっておられるところもあると思いますし、いろいろなところが異業種参入で、人間の体、高齢社会に向けての取組、そういうことでのいろいろなお仕事を考えておられると思いますので、ぜひそういう皆様と今後、関係を持っていきたいと思ひますし、何よりも、ここには従業員・研究者がたくさんおります。そういう方々が、この地域で気持ちよく仕事をしていくためには、地元の皆様といろいろなかたちで連携を持っていくということが大事だと思います。もっと言えば、この臨海部全体がさらに発展することによって、皆が豊かになっていくと思ひますので、ぜひとも今後ともよろしくご協力いただければと思ひます。我々はどんなところでも出てまいりますし、何でもお声を掛けていただければと思ひます。今日はどうもありがとうございました。

○大西会長

ありがとうございました。まさに、我々が会議をしているこの場所で20年の間で起こったことについて適格にまとめていただきまして、今何を目指しているかということについてもお話をいただきました。お話の中にあつたように、新しい臨海部の顔であるキングスカイフロントの新しい企業・団体・組織の活動と、それから臨海部全体の様々な企業の活動が、実はいろいろなかたちで既に結びつきがあるとうかがっていますので、それを本当に出し合いながら新しい産業技術の発展、あるいは研究としての発展を目指していくことができれば非常によいのではないかと思います。これも名称を変更した新しい組織の重要な役割ではないかと思います。

・企業活動見える化に関する取組

企業活動の見える化に関する取組みについて

○大西会長：次に、13のプロジェクトの中に「企業活動の見える化」に関する取組を進めるというものがありますので、東亜石油の古山様からお話をうかがいたいと思ひます。

○東亜石油 古山氏

東亜石油の古山と申します。企業活動の見える化に関する取組ということでご紹介をさせていただきたいと思ひしております。早速ですが、弊社では昨年、企業ロゴを刷新しておりまして、企業全体のブランディングをつくり直している最中でございます。そういったところから、こういった活動に取り組んでいる背景もございしますので、あわせてご説明させていただきます。

最初に弊社の紹介をさせていただきます。設立は1924年ということで、もうすぐ100年になる会社でございます。石油会社ではございますが、元々は販売会社として創業しております。精製に進出したいという思いの下、やってまいりまして、昭和30年に日立造船から現在の土地を取得し、水江町に製油所を建設したところから精製に進出しておりまして、昭和52年に弊社の名物になっておりますフレキシカーという装置を建設し、精製専門の会社に転換を図ってまいりま

して、現在、販売は一切行っていないという事業形態になっております。昭和シェル石油グループに属しておりまして、基本的には生産した製品は全て昭和シェル石油に供給しています。先日報道がございましたが、出光興産とのアライアンスの中にあるグループでございまして、現在は出光興産にも製品を供給しております。石油精製をしておりますと、副生ガス、要するに売り物にならないようなカロリーの低いガスや残滓油等が出てくるものですから、そういったものを利用して発電をしております。その発電した電力で、まずは自社のプラントを動かしますが、電力は東京電力エナジーパートナーに販売をさせていただいております。石油精製装置としては7万バレルと国内でも最も小さい製油所ですが、発電能力は273メガワットでございます。石油と電力でエネルギーを支えるという位置づけで事業を展開しております。プライターエナジーアライアンスというもので、一昨年頃から発足はしているのですが、昨年10月から出光興産のタンクローリーが入ってきたり、船での出荷をしております、現在はシェルのマークとアポロマークが出荷するエリアにたくさん並んでいるような光景になってまいりました。今後どんどん加速していくものと思われまします。生産拠点は臨海部において4つ拠点を有しております、飛び地になっております。プラントがあるのが水江町になりますが、その京浜運河の突き当りに出荷等を行うエリアがあります。京浜運河の対岸の東扇島に同じような出入荷エリアと扇島の端にもエリアを持っておりまして、4km沖合にありますシーバースから原油を受け入れ、全てパイプラインと海底配管を使って水江町の工場まで原油を運んできてまいりまして、ここで処理して出荷をしているというかたちになっております。それからJXTGエネルギーの川崎製油所ともパイプラインが繋がっております、原料等の双方の融通をさせていただいておりますし、臨海部の他の企業の皆様からユーティリティーの供給をいただいたりして操業をしております。石油会社としては非常に小さいですが、全体でも85万㎡くらいしかない会社で、飛び地で苦労しておりますが、何とか臨海部でやっております。

「企業の見える化」ということで、工場見学や地域交流事業のご紹介をさせていただきます。実は、工場見学を積極的に受け入れている形態の会社ではございません。それでも1年間に650名程度の方は見学にお越しいただきます。電話やメールで見学のお問い合わせいただければお断りしないのですが、積極的な予約制度のようなシステムは持っていないということになっております。そのため、見学を受け入れる専門の部署もございませんので、全て私に対応しております。見学者用のスペースや車両もございませんので、例えば「バスで来ます」というのであれば、そのバスで一緒に見るとか、「歩いて来ます」ということであれば歩いて見学したりと臨機応変に対応しております。特徴ある装置を持っている関係で、ビジネス面での見学のお客様は非常に多いのですが、それは各部門で担当しており、この集計の外にありますので、実際にはもう少し多い人数がお越しいただいているかと思ひます。

地域との交流では、町内会の皆様と交流事業をさせていただいております、弊社の独身寮等を複数この地に設けさせていただいていることもあり、そういった面でお世話になっておりますので、町内会の皆様とは年に1回、弊社の事業活動をご報告させていただきながら、ご要望をうかがったり、一緒に事業を進めさせていただいたりしております。どういうことをPRしていくかということで、「見える化」をしている中でいろいろと模索しておりますが、大体「この3つを覚えて帰ってください」という言い方をしながら見学をしています。学生が来た時には、この3つ覚えて帰ってくださいと言うと、本当にこの3つしか覚えて帰らないのですが、実は日本で一番小さい製油所でございまして、歩いて回れる大きさです。見学

としてはコンパクトにできるところがメリットですので、そういったところもアピールしています。それから、国内で最も重質な原油を処理できる製油所ということで、原油は産油国とか、取れる場所で性状が違いますが、重質な原油というのは安いんですね。それを処理している会社でございまして、実物をお見せしながら説明していますが、比較的石油会社は中東に頼ることが多いと思うのですが、弊社は南米など珍しい地域にまで原油を採りに行き、処理しております。それから「発電所の大きさが黒部ダムより大きいですよ」という話をすると、分かりやすいということで驚いていただいています。最近、中学生に話をした時は「黒部ダムが分からない」という問題もありましたが、あれだけ大きなダムと比較して現場の発電所を見ていただくと、「これで同じ能力なのか」というところには見学者の印象としては面白がっていただいております。もう一つは工場のスケールや夜景のお話でして、少人数の見学であれば歩いて見学するというところでアピールをしたいと思っております。装置の大きさや音を直に感じていただいています。夜間の見学というのは受け入れていないのですが、工場夜景ブームのお陰で、弊社装置が一般の方に知られる機会となりまして、お電話でお問い合わせをいただく機会などは増えましたし、ご要望いただいたり、夜景がきれいで「ありがとう」という感謝の言葉をいただいたりという機会もありました。あとは、昨年の夏に川崎市政だよりの表紙に写真を採用していただきまして、非常に反響が大きく、川崎北部の宮前区や麻生区の自治会の方から見学の要請をいただきました。宮前区の方とは実現できたので、お話をしていたのですが「同じ川崎とは思えない」という言い方をされていまして、そういった意味では、まずは川崎の皆さんというところでは、ご協力できるところがあるかと思えますし、弊社も川崎の企業として「こういう会社があるんだ」ということでアピールしていきたいと思っています。今後、「見える化」を進めていくにあたって、新社屋の建設を進めております。来年の冬に竣工する予定になっておりまして、この中に現在は持っていない見学者の受入施設や企業PRをするためのコマーシャルボードの設置といったことを整えております。もう一つが、次世代水素プラントの建設ということで、川崎水素戦略における水素サプライチェーンの構築モデルの実証事業を弊社で実施させていただきます。2020年1月の稼働を目指して建てていますが、これによる見学も進めてまいりたいと思っております。現在この見学の準備を進めておりまして、既にお電話をいただくこともあったりするのですが、年間で2000名を超える想定をしている中では、さすがに専門の対応も必要なので、その辺も整えながら進めていきたいと思っております。

最後に、課題として、見学を担当するようになって難しいなと思っているところを書いてみましたが、石油精製というのは、自動車のように段々とできていくプロセスを目で見ただけなので、お伝えしにくいということと、では「これがガソリンです」と言って見せられるかという危険物であるため、そこも容易ではない。それから、産業の構造上、石油会社のプラントはどの精油所も人が少なく、働いている姿もなかなかお見せできない。ですから、「人がいないですね」と、本当によく見学の時に言われまして、社員がいるだけで喜んでいただけるような場面があったりもします。あとは、屋根がないということで天候に左右されますので、臨機応変な対応が必要かなと思っています。ただ、そういう中でも精一杯何ができるのかを考えた結果、従来DVDを流して見学して終わりというかたちでやっていましたが、見学者にとってよい機会にできればと思ひまして、事前に要望をうかがって、個別に資料や見学ルートの作成をするという対応を進めております。例えば、「何でもいいです」と

言われたとしても、ガソリンや灯油など、「何に興味がありますか」と聞いて、ガソリンと答えられたら、ガソリンはどうやってできるかということに特化してみたり、そういう場面をつくりながら、知っていただくための取組として試しております。もう一つは工場夜景の方ですが、こちらはなかなか難しいのですが、肖像権がないというところでは撮影され放題で、気がつくとテレビに映っている。夕方のニュース番組等で映ったりすると、「明日行ってみようのですが、やっていますか」と電話が入りまして、「そういうところではないです」という対応が必要になったりします。あとは無断で商用利用されていて、最近若い人に人気のバンドのジャケットが当社になっていまして、それは何のご連絡もいただいてなくて、それで少し繋がっているのですが、そのバンドのファンが同じ写真が撮りたくて不法侵入を試みるということもあり、なかなか難しいという問題があったりします。あとは夜中に女子大生の方がカメラを持って装置内を歩いていたことがあり、「開いていたので入ってきました」と言われましたが、そういう進入もありまして対応が難しいところもあります。フレアスタックという火の出る煙突がありますが、「大きくしてくれ」というお電話が入ったり、あとは電球を交換すると電話が来ることがございまして、オレンジの電球が好きな方が多いのですが、球切れすると最近の電球は白いものですから、白くなるとお電話をいただいて「オレンジがよかった」などと言われます。それで、「なんで交換したんだ」と言われるので、一応「担当に確認をさせていただきます」ということで、担当に聞くと変えた理由は安かったからというだけなので、お答えもしにくいことがあります。あとはテレビ局とのお付き合いが非常に増えてきた中では、企画書が非常に無茶なものが届きまして、ナイフで刺された人が装置内で死んでいるとか、全身に電飾を付けて対岸から装置のどこにいるかを探すとか、そういう企画を自信満々に持ってこられるが、どうしようかなということもあります。そういう悩ましさ、対応に困っていることもありますが、ツイッター等で検索をすると、「工場夜景クルーズで東亜石油を見てすごく綺麗で楽しかった」という感想を見ると嬉しいと思ったりしますので、こういうところでもうまい対応が取れればと思って考えております。以上でございます。ありがとうございました。

○大西会長

ありがとうございました。いろいろなご苦労があるんだなと思いました。ご苦労されながら市民のいろいろな要望にも可能な範囲でお応えされているのかなと思います。

・働きたい環境づくりに関する取組

味の素(株)川崎事業所内保育所「アジパンダKIDS」のご紹介

○大西会長

次に、少し角度を変えて「働きたい環境づくり」ということで、これもプロジェクトの中の一つに働きたい環境づくりプロジェクトがありますが、それに関連して味の素川崎事業所内の保育所「アジパンダKIDS」について味の素の小池様からご紹介いただければと思います。

○味の素株 小池氏

味の素の小池と申します。よろしく願いいたします。本日は、私どもの会社内にある事

業所内保育所をご紹介します。「アジパンダ KIDS」という園名になっていますが、私どもの会社の社員のみに解放されている施設となっております。アジパンダというのを聞いたことがある方、見たことある方、いらっしゃいますか。アジパンダは私どもの会社のキャラクターで、味の素の瓶などについております。お子様と親御さんがせっかく会社まで一緒に来たのに離れ離れになって寂しくないように、キャラクターがお出迎えするように園内のいろいろなところに散りばめております。園児に寄り添いながら社員の働くところ、就労をサポートしたいという思いでアジパンダ KIDS という名前になっています。私どもの会社紹介ですが、食品製造業になっております。保育所をなぜ作ったかという話に結びつきますが、男女比は7月1日現在で3対1程度で、女性が3割程度の会社です。食品なのに少ないと思われるかもしれませんが、女性がどんどん増えてきています。このところで、女性が活躍して就労を継続するということもありますし、男性にも育児参加をしてもらいたいというのもありまして、そんな思いを込めながら保育所をつくったという現状があります。

設置を決めた背景ですが、私どもの会社では、働き方改革では2008年からいろいろとやってまいりましたが、2015年に一気にドライブをかけました。どうしても女性が少ない、家庭用の商品を扱っているのに、判断するポジションに女性がいないという号令が現社長からかかりまして、それをいろいろと突き詰めていくと、女性の背中を押してもだめだと。女性は押されても、男性は押されていない。女性がもっと過ごしやすい環境をつくっていかうということになりました。在宅勤務をされている企業は多いと思いますが、私どもの会社では、どこでもオフィスという名前になっておりまして、今はサテライトオフィスが全国に100箇所程度あり、家だとお子さんがいて仕事やりにくいという方、出張の合間、営業職の女性にも使いやすくなっています。大きいのが所定労働時間変更で、朝は早いですが、4時半で終わりです。これをやることで、これまで育児をする方が時短で4時か4時半に「お迎えに行くのですみません」と言いながら帰らなくてはいけないのが、全員4時半なので気軽に帰れる。男性の方も育児参加できますし、実は言えなかったけれど介護をしたり子どもの面倒を見たいという方が気兼ねなく帰れるような環境をつくりました。やっとここまで来たので、ダイバーシティ推進のタスクフォースを立ち上げまして、私はそこに入っています。ここで必要なのが、せっかく制度があっても使えないということがないような風土づくりと、もう一つ風土づくりと一緒に進めているのがこの保育所でした。やはり何をやっても外の課題として保育所の課題は残ってしまいまして、待機児童の問題があり、この地区ですと川崎と東京本社、品川の拠点は激戦区ですのでどうしても保育所に入れなくて辞めてしまうという方が出ます。それから、私どもの定期異動が7月ということで、それに伴って保育所に入れないということで諦めてしまうポジションがないようにということで企業内保育所を設立をしました。2016年の冬から検討を開始して2017年に設置を決定し、今年3月に開園しました。実際に苦労した点になりますが、受け入れ人数や場所を決定した経緯として苦労した点が3つあります。1つ目がいわゆるお金の考え方です。どうしてもお子さんを預かるとなると1人当たり30万円から50万円のコストが見込まれます。そうなるとその負担はやはり少ない方がよいということで助成金を活用したいということで、今回企業主導型というのを活用するというのを大前提としました。そうなる場所の制約や人数の制約等についてたくさんの規定やルールがありますので、その中でできることということで、施設のスペックを上げるところはハードルが高いので19名にしようということになりました。また、場所を選ぶ時

に2階以上になるととてもハードルが上がります。避難する時には保育士が3人背負ってどれだけの段差の高さで降りられるかという規定が細かくありますから、福祉施設の用途ですべて作るというのはハードルが高い。そうなってくると東京は連れてくるのも無理そうだし、物件もない。川崎は研究部門で女性がとても増えてきているので、自社物件の活用が見込めて通勤もそれほど困難ではないかなということで、最終的に川崎の事業所内に決定しました。2つ目の苦労した点が社内外での目的、コンセプトの決定です。希望する人が全員入れるとなると19名では到底足りません。面積比で人数が決まってまいりますので特に0歳から1歳は9人しか枠がない。そうなってくると社内でどう説明するかというと、完全にセーフティーネットです。地元の保育所を申し込んで、それでもだめな場合は社内施設もあるということで話をしました。味の素らしさとは何かと聞かれたときに、私どもの会社は食の会社ですから、食と健康です。園のデザインもキッチンが見える、ライブキッチンのようなものを設置しています。外に対しては、女性が活躍して、男性も育児参加ができるという環境の一環としてキャリアを中断しないということと、やはり待機児童の課題に答えることで社会に対して貢献するということを入れました。このコンセプトづくりが揺らいでしまうと、場所や定員等すべてに大きく影響してしまうので、ここは苦労した2つ目の点です。もう一つ、苦労したのが運営会社です。企業主導型がとても流行っているので、運営委託会社を見つけるのが何より大変でした。ここが決まらないことには開園できません。あとは工夫した点としては保育料を4万円で統一したことです。その中にはサービスも入れています。紙おむつ持ってこなくていい、洗濯のサービスもします、寝具もタダです。想像してみてください。電車でこれらのものを持って来るのは大変ですよ。それから、働き方改革の点も入っています。保育士は、通常一人ひとり名前を書いたオムツを管理したりすることが繰り返されていきますが、そういう管理をする工数、時間、保育スタッフの生産性を上げるということを考えると、こちらですべて用意してしまった方が、委託料でそこにかける人件費よりも圧倒的に安かったです。それで、こちらで全て用意をして管理をしなくていいということしました。それから、通常ですと延長料や加算費を計算する労力がすごくかかるため、全部均一で4万円にして、社員への納得感と、あとは保育士がそれらの計算をしなくていいという生産性の高い働き方改革を導入しています。4月に子どもが入園した社員の感想と課題ですが、一番良かったのは社員に対して会社がここまでやってくれるというメッセージがダイレクトに伝わったことです。開園前の説明会を行いましたら90名が参加しましたが、6割が男性社員でした。子どもを連れてきても良いと言ったら、男性社員が家から連れてきました。まだ保育園がないときです。関心の高さがうかがえたのと、社員からは覚悟、会社への期待の高さがうかがえたというのが、とても会社としてはうれしいところです。メリットとしては、開園時に実際に申し込まれた方は90名中22名でした。実際に入ったのは4人ですが、ほぼほぼ内定が半分くらいは出ている状態で、他の方は認可外に行けるという状態にありました。そうなってくると、ほぼほぼ皆が復職への不安がすごく軽減されて、本人の不安軽減とともに、会社としてもこの人はいつ帰って来てくれるというスケジュールが組めて人員構成のやり繰りや定期異動にも良い影響を及ぼしたというのが1年目で感じた大きな効果でした。課題としては、地域的なものです。私どもは全国に拠点がありまして、大阪や福岡などでも待機児童が多いので、そこはどうしてくれるのかというような話はありました。そうなってくると、提携できる保育園を確保して、大阪と福岡は提携の保育所を設けました。今は企業主導型で

すと枠をたくさん貸してくださるところもありますし、自分で園を開かなくても枠が余っている企業主導型の保育園は探すところたくさんありますので、そこと提携するということで解消ができています。皆さんの復職に向けて何かあったときに隙間ができないような就労継続できる仕組みということで私どもの会社はこのような取組を行ってまいりました。私の方からのご紹介は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

○大西会長

ありがとうございました。それでは、プロジェクトの一つに交通機能強化プロジェクトというのがあります。これに関連して、川崎鶴見臨港バスの入野様、お願いいたします。

○川崎鶴見臨港バス 入野氏

川崎鶴見臨港バスの入野と申します。平素は私どものバス事業、また京急グループの各社の事業にご理解とご指導を賜りまして誠にありがとうございます。この場をお借りしましてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

2年ぶりのキングスカイフロントでの会議開催ということでございますので、私どものこの地域における今後の事業展開ということでお話をしたいということでお時間をいただきました。ありがとうございます。今日はあまり多摩川の橋のお話が出ませんでした。実際には今急ピッチで橋の建設が進んでおりまして、2020年度の完成・供用開始というところに向けて工事が進んでいるところであります。多摩川を挟みまして京急グループと致しましては、空港線の空港エリアとこちら側の大師線の臨海エリアを大変重要な戦略拠点と考えてございます。その位置づけの中で橋ができるということになれば、やはり私どもと致しましては兩岸を結ぶ交通網の整備という計画をして然るべきだということでございます。言いたいことは、要は空港エリアとこちら側の臨海エリアでバスの路線をひくということで、計画をしているということでございます。実は現時点では資料等がお配りできないのですが、私どもの臨港バスが産業道路駅とキングスカイフロント、対岸のグループ会社ではございます京急バスが天空橋付近の開発を計画してございますエリアと空港エリアから交互に行ったり来たりということで、両地域の活性化が図れば良いということで計画をしているところでございます。現実的な運行経路と運行回数につきましては検討中でございます。運行開始時期でございますが、これは橋の完成・供用開始と同時に運行を開始するというイメージで考えてございます。私どもグループ・バス事業者といたしましても今後とも羽田臨空と川崎臨海両地域の発展に貢献できるように努力してまいりますので今後ともよろしくお願いいたします。

○大西会長

ありがとうございました。プロジェクト関係について、いくつか様々な切り口でお話いただきありがとうございました。それでは、全体を通して柏木先生からコメントをお願いいたします。

○西武文理大学 柏木名誉教授

先ほど野村理事長からご説明がありましたが、殿町では、野村理事長の実験動物中央研究

所がまっさらなところに出ていただいてライフイノベーションという色がついた。国際戦略総合特区も含めて、そのあとに進んできたのは、それこそ実中研に来ていただいたお陰だと思っておりますので、ぜひこの後も全体をまとめていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

東亜石油のお話については、ひょっとしたら分散型立地というのは都市型石油精製の立地のモデルになるのかなと思いました。ついでに申し上げますと、エネルギー産業は世界的に見ると 1,300 兆円になるので、ビジョンの 5 ページをみると石油が 6%しか減っていないのですが、30 年後、2050 年にはガソリン車やディーゼル車はなくなると言われているので、それがどのくらいのガソリンや軽油に影響してくるのかということを、次回くらいに教えていただければと思います。というのは、自動車が EV 化し、水素が増えてくる。ビジョンでも水素市場が拡大してくると書いてあります。ただ、需給バランスの関係で需要が増えてくれば当然水素が増えてくると思うのですが、自動車に使うガソリンが減って 0 に近くなるということはかなり危機的な状況で、そうすると 1300 兆円の世界規模の市場がどのくらい減ってくるのか。石油から水素等にシフトする中で、臨海部の石油会社がどうなっていくのかということを教えていただけるとありがたいと思っています。

それからダイバーシティの話ですが、私のゼミ生が金属加工の企業に就職したのですが、IoT や AI が進んでいくと、女性の活躍が生産現場まで入って来る可能性があるということで、彼女にも子どもができてみずっと働けるといいなと思って味の素の話をお聞きしていました。できれば、いろいろな企業でこういう動きを増やしていただけると、女性が働くうえで非常にありがたいなと思います。

バスについては、ぜひ増発していただければと思います。

○大西会長

ありがとうございました。それでは、川崎市全町内会連合会長も務めておられる島田副会長からコメントをいただければと思います。

○島田副会長

私は全町連の会長並びに川崎区の連合会の会長もさせていただいております。本協議会の副会長もさせていただいております。地域に向けての交流あるいは意見交換会等についてお話が出ておりましたが、このことにつきまして、改めて感謝申し上げます。私どもは、地域に密着した団体でございますので、そうした中からしますと生活環境をしっかりと高めていかなければということでは、まず防災・介護・医療ということがございます。これに加えて交通事情等が備えてこそ快適な生活環境が作り出されると考えています。ということになりますと、産業等について、特に医療については先ほどキングスカイフロント協議会の野村さんから話がありましたが、こういったことも地域と密着した住民だからこそ、そういったものに期待をし、ここに居場所があるんだという方向にも繋がっていくのかなと思います。また、企業の方々もエネルギーのことも含めて、生活をしていく上では大事なインフラに密着した企業であるということになります。やはり川崎の中で、臨海部において操業されている企業の皆さんと、互いにそういった情報交換をしながらお互いの立場の中で理解し合っていくということが一番大事なことだろうと思っております。特に 152 万人を超えている川崎市にとりましても、少子高齢化は進んでおります。そういつ

た中で、ソーシャルネットワークのように社会の仕組みが変化してきて、必ずしもお互いの人間関係が良いとは言いきれない部分が出てきている。そういったことになると、先ほどの味の素のお話にありましたように、これからは女性が働く社会の環境、それにはどうあるべきかということをお聞かせいただき、なるほど働き方は随分と多様化してきているんだなということを感じました。そういったことを含めまして、やはり地域の事情も変化する中でどう住民同士がお互いにまちづくりにしっかりやって、暮らしよい街につなげていくかということをお互いに非常に感じさせられたということをお話の中でさせていただきたいと思います。いずれにしてもお互いに、企業の中で、区の中でそれぞれの方々と、30年後に向けての将来の道筋、方向性を出されたということは、非常にありがたいし、住民としてもその方向性に向けて協力して、それぞれの関係の方々とこれからも良い社会づくりに協力していけたらと思います。

○大西会長

どうもありがとうございます。今日会議の途中で名前が変わりまして、今は川崎臨海活性化推進協議会が行われているということですが、新しい名前に相応しい、これまでにない多面的な観点から議論が行われているのではないかと思います。特に東亜石油から市民の方が注目する臨海部の一側面について、苦労話も含めてお話いただきましたし、それから味の素からは女性だけではないと思いますが、小さいお子さんがいる方がどう働き続けられる環境を整えられるかという観点と企業努力についてもお話いただきました。こういうこと全体が協議会の中で相互に参考にする事例として報告されることで、いろいろなヒントが得られるということだと思います。もちろん、片方で企業の本業、あるいは様々な企業活動のリンクということも重要なテーマで、これについても野村理事長から貴重なお話が聞けたのではないかと思います。キングスカイフロントでの活動、その中にリサーチコンプレックスという文科省の新しい事業も展開されていますので、大学等を中心としたこうした動きについても関心のある企業はうまくそれを取り込んでいくようなことができていくと、川崎臨海部に立地している企業の活動がさらに一回り広がっていくのではないかと思います。そういう意味で、協議会としてビジョンに示されたことを具体的な事例の積み重ねを通して実現していくことができると思います。最後にまとめとして川崎市の加藤副市長からご発言をいただければと思います。

○川崎市 加藤副市長

本日は、大変お忙しい中、またお暑い中、当協議会にご参加いただきましてまことにありがとうございました。先生からまとめということでしたが、私からは閉会のご挨拶ということで締めさせていただきます。会議の中で臨海部ビジョンにつきましてご報告をさせていただきましたが、この間策定の作業段階から企業の皆様、そして関係団体の皆様と意見交換を重ねて策定をしてまいりました。また当協議会にも策定状況について、ご報告をさせていただいたところでございますが、これまで策定にあたりましてご協力をいただきました関係者の皆様にこの場をお借りして感謝を申し上げたいと思います。また、臨海部ビジョンの今後につきましては、進捗状況について、当協議会とも情報共有を図りながら進めてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。名称変更につきましてもご賛同いただきありがとうございました。これからの企業の皆様、市民の皆様、そして関係団体の皆様と連携を図りながら臨海部の活性化に向けて取り組んでまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。なお、引き続き忌

憚りの無いご意見をいただければと思います。また、皆様方と交流を深めていただければと思いますのでどうぞよろしくお願いしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

○臨海部国際戦略本部：閉会

以上